

# H・カントロヴィッツの独裁論についてのノート

—Dictatorships; 1935 の紹介を中心に—

坂 東 義 雄

(1980年10月16日 受理)

## A Note on Hermann Kantorowicz, Dictatorships; 1935

Yoshio BANDO

### I は じ め に

本稿は、ヘルマン・カントロヴィッツ (Hermann Kantorowicz, 1877-1940) の *Dictatorships* (1935)<sup>1)</sup> の内容を、比較的忠実なかたちで紹介しようとするものである。

カントロヴィッツは、周知のように、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ドイツを中心に興隆した反概念法学の法思想の潮流・「自由法運動」(Freirechtsbewegung)の「闘士」として知られている。1906年、かれがグナエウス・フラヴィウス (Gnaeus Flavius) の名で世に出した *Der Kampf um die Rechtswissenschaft* は、当時のドイツの法学界に大きな衝撃を与えるとともに、かれを、ドイツにおける「自由法運動」の揺るぎない代表者の地位に就かしめたのであった<sup>2)</sup>。カントロヴィッツは、1913年から27年まで Freiburg 大学教授、1927年招聘を受けて Columbia 大学客員教授、1929年以来 Kiel 大学教授の地位にあって、刑法、法哲学などを講じていたのであったが、1933年ナチスが政権を掌握するや、かれは「その自由主義思想のゆえに」、かれの親しい友人・G・ラートブルフ (Gustav Radbruch) らとともにナチスの厳しい圧迫を受け、かれはイギリスへ亡命した。いわば、ナチスの時代に生き、ナチスの独裁政治の犠牲者の一人であったカントロヴィッツが、当時、独裁政治にたいしてどのような考えをいだいていたかを考察することは、かれの法思想に関心を寄せるものにとって、おおいに興味をそそられるばかりでなく、思想の形成と社会の関係という法思想史研究にとってきわめて重要な問題を探究するさいの、一つの手掛りにもなるのではないと思われる。

このような問題意識をもってカントロヴィッツの *Dictatorships* を繙くとき、公刊後半世紀に近い時を経過した同書から、なおわれわれは、法理論や独裁論の研究において示唆的と思われるユニークな指摘を読みとることができるように思われるのである。こうしたカントロヴィッツの独裁論の二、三の特徴を摘示すれば、たとえば、(1) 独裁の概念定義の学的性格をことばの問題としつつも、それは、ことばのもっている習慣的な用法と矛盾しないものでなければならず、科学の目的にとって有効で、問題の解明のため、真実の記述、明確な区分、完全な分類のための道具として

役立たねばならない、とする定義論にかかわる提言<sup>3)</sup>、(2) このような定義論に立脚しつつも、政治現象にたいする社会学的研究を基礎に、この立場から独裁を政治的、技術論的、歴史的の三つの要素から定義しようとする提案、(3) マックス・ヴェーバー (Max Weber) の pure type の意味での社会学的な定型論——これを、カントロヴィッツは、独裁の「骨格学」(osteology) と名づけている——によって、独裁の諸形態の分類をおこない、独裁理論に指針を与えようとする試み、などをさしあたりあげることができよう。

ところで、独裁を対象とする研究には、敢えて大胆に言えば、つぎの二つのタイプのものがあるように思われる<sup>4)</sup>。その一つは、独裁について論じるとき、独裁権力の現実的作用形態の分析をおこなうのではなく、独裁の法理論を、また独裁を歴史的・社会的な現実の政治形態として把握するのではなく、主としてそれを法学的に正当化するための理論の構築をおこなうタイプである。もう一つは、独裁の法学的正当性の問題ではなく、歴史的・社会的な現実の政治形態としての独裁の分析やその分類に直接の関心を置くタイプである。そしてここでは当然、独裁の歴史的・社会的現実形態ばかりではなく、それにも増して、権力を握る独裁者が使用するところの権力手段およびその作用に、主たる関心が注がれるのである。

第一のタイプによって独裁論を展開した一つの例を、われわれはカール・シュミット (Carl Schmitt) にみることができるであろう。周知のように、シュミットは、独裁の概念の決定にさいして、独裁の「具体的例外性」(konkrete Ausnahme) という観念にその基本的主張を置いている。すなわち、独裁の本質は、かれによれば、一定の目的を達成するための「手段」であり、一時的な「例外状態」である。すなわち、シュミットは、現行憲法を維持するためまたは新憲法を制定するという具体的目的のために憲法を例外的に停止するという点に、独裁の本質を求めたのであった。かれは、委任的独裁と主権的独裁の相違を検討し、それぞれが法的に正当化される根拠をつぎのように示している。委任的独裁は現行憲法を維持するために一時憲法を全部または一部停止するものであり、それは憲法の規定に従っておこなわれる独裁である。それゆえ、独裁者にたいして独裁権は、法的には現行憲法によって付与されているのである。これにたいして、主権的独裁は理想の新憲法制定を実現するための独裁である。これは現行憲法によって独裁権を与えられているのではないが、独裁によってこれから実現されようとしている将来の憲法が独裁権の法的根拠となっているのである。すなわち、シェイエス (Emmanuel Joseph Siéyès) のいう「憲法制定権」が独裁権を基礎づけている、という。以上のように、シュミットのこのような独裁論は、独裁権力の現実的作用形態の分析というよりは、その法理論、すなわち、独裁を法学的に正当化するための理論の構築をめざすところにその特色があるといえよう<sup>5)</sup>。

つぎに、第二のタイプによって独裁論を展開した例を、われわれは現代イギリスの著名な歴史家アルフレッド・コバン (Alfred Cobban)、また同じく歴史家であるが、現代アメリカのハルガルテン (George W. F. Hallgarten) にみることができるであろう。コバンによれば、独裁とは、まず単一人の支配でなければならない。しかも独裁者は、本来的には世襲によってその地位を獲得した

ものではなく、実力か同意によって、あるいは両者の組合わせによってその地位に就いたものである。また、独裁者は絶対的主権を保持しなければならない。すなわち、全権力は独裁者の意思に由来し、しかもその範囲において、それは無制限でなければならない。それは、かなり頻繁に専断的な方法によって、法律によってではなくむしろ命令によって、行使されなければならない。さらに独裁権は、一定の任務のためにその存続期間が制限されているものであってはならず、独裁者は自分以外のいかなる権威にたいしても有責であってはいない。なぜなら、このような制限は、絶対的支配と両立し得ないからである、という。このような独裁の概念を基礎にして、独裁の諸形態を分類し、これらを考察しようとしている。そしてそこでは、さきに述べたように、独裁を法学的に正当化するための理論の構築というよりも、独裁の現実的作用形態の分析に主たる関心がむけられているのであり、独裁の権力手段やその作用が問題となっているのである<sup>6)</sup>。また、ハルガルテンの場合についてみれば、かれはヴェーバーの社会学の方法を極めて自覚的にその独裁論に導入し、展開している。すなわち、かれは、独裁の具体的現実形態を対象にして、つよい現実的関心をもってこれを政治社会学的に分析している。このさいかれは、とくに社会経済的な視点から歴史上の独裁を四つの基本形態に区分し、定義しているのである<sup>7)</sup>。

本稿で紹介しようとするカントロヴィッツの独裁論は、上にみた二つのタイプのうち、第二のタイプに属するものといえるであろう。そこでは、さきに述べたように、歴史的・社会的現実における政治形態としての独裁が分析の対象とされるとともに、一定の要素を基礎として諸定型に分類されている。今世紀の初頭、ドイツにおける法社会学の草創期に、マックス・ヴェーバーらとともに法社会学の確立・発展に力を尽したカントロヴィッツによる、その社会学理論の独裁論への具体的適用という性格をも、この著作はもっているわけである。このような意味においても、カントロヴィッツの本著作の意義は大きい。

なお、筆者は、カントロヴィッツの独裁論を異議なしとするものではない。とはいえ、カントロヴィッツの本著作の紹介を目的とした本稿では、これにたいする検討は、他日を期さざるを得ない。

## II カントロヴィッツの独裁論

### ——Dictatorships; 1935 の内容<sup>8)</sup>——

#### 1 独裁の定義

(1) 独裁という用語は、実にいろいろなことを意味するのに使われている。そこで、われわれは、それをどのような意味で使おうとしているのかを、まずはじめに決めてかかることをしなければならない。それゆえ、そのような提案は一つの決定をとまなうのであり、その用語はどんな成文の憲法やどんな法的な文書にも使われていないようだから、われわれは、現在通用している多くの定義のなかから一、二を選ぶことも、新たに定義を提案することも、ともに自由である。ことば上の問題を本質的な問題と信じこむことほど危険な混乱はないし、また、その逆のことをおこなうことも同じである。ところが、そうした混乱はよくおこなわれているのである。ヒューム (David

Hume) もつぎのように言っている。「哲学者が文法家の領域に入り込み、ことばについての論争をやることは実によくあることである。そのくせかれらは、自分たちがもっとも重要なことを議論しているのだと思っているのだ」と。この種のばかげた議論は、われわれの分野においてもよくある。1919~20年に、ドイツ人と、ロシアのマルクス主義者たちは、独裁について論争をおこなった。そこでドイツ人は、独裁は当然個人的独裁でなければならず、政党的独裁などというものは論理的に不可能なのだと熱心に主張した。反対に、同じように熱心に、ロシア人はこれを否定した。しかし、自由はけっして放縦を意味しない。これは、また、定義上真なのである。定義は辞書の編纂の過程で見出されるものではないとはいえ、あらゆる定義は、少なくとも、個々のことばがもっている習慣的な用法と矛盾しないものでなければならない。すなわち、定義は、けっしてそれ自身真でも偽でもないけれども、それは、個々の科学の目的に有用でなければならないし、また、問題の解明のため、真実の記述、明確な区分、完全な分類のための道具として役立たねばならない。

これらの、用語上および科学上の明白な要請が、独裁に関する科学上ないしは政治上の現代の論議では受けいれられていない。たとえば、ドイツの学者はファシスト国家を独裁国家と呼ぶことを許されていないし、イタリアの学者はそう呼ぶことをはっきり奨励されてはいない。ドイツの憲法に関する最近刊行されたナチスのテキストは、独裁者 (dictator) を非常時の権限 (extraordinary powers) を授けられた支配者と定義づけているが、しかしそれは、特殊例外的な職務または一時的な非常事態に限定されている。それゆえ、マクドナルド (MacDonald) の国政は独裁的であるが、ヒットラーやムッソリーニの支配は独裁的ではない、とナチスのテキストは説明している。この定義はことばのどの語法とも相容れないし、また用語上好ましくないものだ。一方、ある著名なイギリスの政治家は、少し前に、つぎのように述べたことがある。「こんにち合衆国は、実際、独裁下にある。その国ではデモクラシーは破壊された。いまやイギリスの国政がデモクラシーの守護者である」と。この考えは、デモクラシーの概念として、強力な行政権とは相容れないようなものを前提としている。このような概念は、たんにデモクラシーにとって危険である——この政治学上の問題は社会学者の興味を引かないが——ばかりでなく、科学的にも異議の余地があるものである。すなわち、それは、デモクラシー対独裁という社会科学における重要な論争点をぼやかしてしまうものである。ルーズヴェルト大統領は、被治者の同意なしには治めることができなかった（この点に関しては、「ルイジアナの独裁者」といわれた H・P・ロング上院議員についても同様である）。これに対し、われわれが独裁者と呼ぼうと提案している人はオートクラット (autocrat) なのである。ルーズヴェルトは、論議や批判や情報の交換を禁じてはいないが、われわれがそう呼ぼうとしている独裁者は、命令 (dictation) によって支配するのである。われわれは、われわれ自身の定義を示すにあたって、その点を留意しておかなければならない。

(2) われわれの定義を、政治的、技術論的、歴史的要素という三つの要素から構成することは有益であろう。われわれは、前述のような政治をオートクラティック (autocratic) な独裁 (dictatorship) と呼ぶように提案している。それは命令によっておこなわれる。しかも、そこでは、被治

者はいまも、より少なくオートクラティックなあるいはより少なく不自由な元の制度を記憶しているのである。この定義は、不動かつ絶対的なものではなく、融通のきく相対的なものである。すなわち、この定義は、あらゆる社会的・歴史的現象と同様に、日常的な社会の流れのなかに存在するところの政治にあてはまるものである。それゆえ、ペダンティックではあるが、政治形態は、それがオートクラティックであり、命令によって活動し、より民主的ないしは自由な元の制度の記憶が、被治者の心のうちにまだ残っている限り、独裁であるというべきであろう。

(3) これらの三要素は、いずれも、さらに詳細な説明が必要だ。オートクラティックということによって、私は、その権力が被治者の同意から独立しているところの支配を意味しているのである。これは、権利の法的な意味においてではなく、総体的研究のような、社会学的意味においてなのである。法的に言えば、現代の独裁者はオートクラットではない。だが、被治者の同意なしに支配する自立的な権利をもっている者は誰もいない。また、生まれながらの主権的独裁者は誰もいないのである。すべて、委任にもとづく (by commission) 独裁者なのである。すなわち、主権者——それは国民の場合もあれば君主の場合もあるが——が、権力——その権力とは、一般的には、一定期間のあいだ非常事態における職務を処理する権限であり、またたまには、行政部や司法部に干渉する権限なのであるが——を、多少とも法的な形式にもとづいて独裁者に委任したのである。しかし、その委任期間の終了の以前でも以後でも、独裁者はリコールないしは辞任させられることがあるのである。「主権的」独裁者 (“sovereign” dictators) および「委任的」独裁者 (“commissionary” dictators) の多くの歴史的な実例が存在する。ところが、ヨーロッパにおける主権的独裁の最近の唯一の例は、ユーゴスラヴィアの最近の王、アレクサンダーの1929年以来的のそれであった。これは、1931年までは公然の独裁であり、それ以降は潜在的な独裁であった。ムッソリーニでさえ、委任のタイプに属する。イタリアの王は、法によっていつでもかれをリコールすることができるのである（その上、国会 Grand Council はもう一度かれを指名することも可能なのである）。ロシアの指導者でさえ、自分たちを、なお、「人民の委員」 (“commissars of the people”) と呼ぶことによって、法的な意味ではオートクラティックな支配者ではないというかれらの意図を示しているのである。そして、事実、統治機関としての人民委員会は中央執行委員会 (the Central Executive Committee) によって任命され、中央執行委員会は連邦ソヴィエト会議によって選出され、さらに順々に、連邦ソヴィエト会議は下級ソヴィエトによって選出される。ドイツの独裁でさえ、本来的にもその現在の権能においても、委任的なものである。その独裁権は、1933年3月24日の授権法により、国会によって承認された。「帝国法は帝国議会によって制定される。それらは憲法と矛盾することを得る。……この法律は1937年4月1日に失効する」。この法律はいまなお効力を有している。すなわち、1934年2月14日の「帝国の組織に関する」法律には、つぎのような規定がある。「帝国政府は新憲法を決めることができる」、と。しかし、政府は、授権法に関してはそのようにしなかった。そして、ヒットラーがつねに国民に呼びかけているという事実も、もしかれば、国民はその不満を表わす権利をもっており、したがってかれの辞職を要求する権利をもっているのだということを認

めようとしなければ、法的には何の意味ももたないわけである。

しかしながら、社会学的にみれば、現在の独裁者はすべてオートクラットである。かれらのオートクラティックな権力は、法律にその基盤をもっているのではなく——たとえ、どれほど法律がかれらの地位を認めていようとも——、かれらは、事実上、被治者の同意から独立しているのである。独裁者のうちのいく人かは、終始一貫して、たとえ国民投票や選挙が自分に対して反対の決定をしても、自分はその決定を無視するだろうと公然と宣明している。もちろんかれらは、絶対的に独立しているわけではない。たとえば、かれらは、マックス・ヴェーバーの社会学において「スタッフ」と呼ばれている者、すなわち、専門的な補助者および事務官の機構、正規のまたは私的な軍隊、公のまたは政党の警察、ならびにその種の人びとに依存している。しかし、この点は、考え得るどのような種類の政府であろうと、必然的に同じことである。イギリスでさえ同じである。アメリカの軍隊でさえ、もし軍隊がそのように望むならばいつでも権力を握ることができる。スタッフは、無数の物理的・精神的・社会的条件といったような、あらゆる支配者、あらゆる人間と同様に、独裁者が影響される諸条件の一つにすぎない。しかしながら、これは、独裁者の独裁権を侵すことはない。権力と影響力とは区別されねばならない。人は自己の願望と助言とによって、他人の意思を決定することが可能であるかぎり、これらの他人に対する影響力をもっているわけである。また人は、自己の命令によって、他人の意思に反してもそれらの人の行為を決定することが可能であるかぎり、権力をもっているわけである。きらわれている圧制者は、大きな権力をもっているが、影響力はほとんどもっていない。その資金主、将軍、夫人、聴罪師は、いかなる権力をもたずして、決定的な影響力をもっているのである。前者は、もし願望や助言以上に強力なことを口にするのを恐れていれば、自己の権力を失うであろうし、後者は、もしその人たちが、度を越えて命令を口にするようなことがあれば、自分たちの影響力を失うことになるだろう。だから、オートクラシーとは、ここではただ、独裁とデモクラシー——これは、被治者の同意への依存を意味している——との基本的相違をあらわすという意味をもっているにすぎない。もちろん、独裁は、實際上この同意を得ていることもあろう。というのは、被治者にかかわりなく支配するということは、必ずしも、被治者の同意なくして支配するということの意味するわけではない。「自由主義」という名称をきらう独裁者をして、自らの政体は「民主的」とであると語らしめているのは、まさに、これら二つの概念の混乱である。

独裁者がこのように被治者から独立しているということは、仮定上の関係という性質では真実であるが、このことを確認することはつねにたやすいこととはかぎらない。これがはっきり判断され得るのは、ただ、公然の闘争が独裁者の決定的勝利あるいは敗北をもって終了した場合だけである。その判断が困難であるもう一つの明らかな理由は、国民の自由な意思の表明が独裁政治のもとでは不可能であるという事実によっている。ヒットラーの場合、しかしながらこの困難さは、ザールの鉱山地区における国民投票（1935年1月14日）およびチェコスロヴァキアのもっとも工業化の進んだ各地方での選挙（1935年5月19日）における周知の結果によって、ある程度克服されている。こ

の出来事は、間接的にしかも他人によってなされたものであったが、ナチス体制の人気にかんして当然いられるべき何らかの疑いを、ドイツ人自身のうち労働者のあいだでさえ、不可能にしてしまっているのである。このことは、オーストリアにおいても同じであろう。他の諸国においては、われわれは、公平な観察者の直感的な判断にたよる以外にしかたがない。私は、現在の独裁者の多くは国民の大多数によって支持されているようだ、といってもいいのではないかと思う。この点は、明らかにトルコやポルトガルにおいてそうだといえるし、また多分、イタリアやポーランド、ロシアやユーゴスラヴィアについても同じである。だがしかし、オーストリアや多分ラテンアメリカの独裁のうちの多くのものは、明らかにそうではなからうと思われる。大変疑わしい例——それは両方の困難が独裁者自身の判断さえを不明確にさせていそうなことを示しているが——は、最近の陸軍元帥ピルスドスキー (Field-Marshal Pilsudski) の場合である。しかし、かれが、政治的抵抗に遭遇したのち、最高の官職のすべてまたはそのうちのいくつかを辞任ないしは辞退することによって、自分のまれな出世を五度 (1920, 1923, 1926, 1928, 1930) 中絶したというのが事実である。つまり簡単にいえば、かれはかれの死の前に、全独裁権を陸軍大臣としてのかれの手中にではなく、プロフェッサー・モチーキ大統領の手中に集中させる新しいポーランド憲法に同意し、支持したのである。もしかれが、人びとの意思に反してまでも支配することができないためにそうしたのならば、かれはオートクラットとは呼ばれなかったであろう。しかし、もし、かれがこうむりがちであったといわれている神経的興奮に襲われて、かれが敵対者をやたらに過大評価し、自分の政治体制を無事に続けることができたのだとすれば、かれの事実上の地位は、実際のところ、オートクラットのそれであったといえよう。いまやかれの死は、この問題を解決できないものにした。医学においてそうであるように、社会学でも、判断がいつも可能であるとはかぎらない。

(4) われわれの定義における政治的要素については、これだけにしておこう。他の要素についても、また若干の説明が必要である。私は、オートクラットの意見、意思、感情が被治者を強制する範囲内において、「命令」の技術論的要素について話してみよう。これは、消極的手段と積極的手段を要する。消極的手段とは、自由な論議や批判の妨害と抑圧、多数あるいは少数者の反対意思の粉碎——とくに、それが組織的なものであれば粉碎が必要となる——であり、そしてさらに、国の内外に流れる何らかの重要なことに関する情報の差し止め、である。これらの手段に加えて、つぎのようなものが補助的手段として使われる。議会の廃止、自発的な集会の禁止、政党や経済的組織・宗教的組織の解散、言論の自由の圧迫、学校や大学における教育の監視、公私にわたる言論の検閲、個人の自由のあらゆる保障の停止ならびに法の執行の停止、有力な反対者の追放、そしてそのほか無数の種類におよぶところの、憲法上・刑法上・行政上・訴訟手続き上・軍事上ならびに政治上の手段——これらには、合法的なものと非合法的なものとが混り合っている——といったものがある。ときどき、禁じられた抵抗と許容された批判とのあいだに、すなわち、奨励される「建設的」批判と罰せられる「破壊的」批判とのあいだに微妙な区別が引かれるわけである。

また一般的に、これとの関連で、「暴力」と「恐怖」が論じられている。これらはとくに、ファ

シストの敵たる共産主義的独裁と共産主義者の敵たるファシストの独裁とが互いに他を攻め合うときに、いつもかれらによって言及されるのである。だが、もしわれわれが刑法の合法的な適用（いかに苛酷であれ）と「暴力」や「恐怖」とのあいだに実際に役立つ区別を立てようとするならば、われわれは、物理的強制力の非合法的な行使とそのような行使にともなう不安の拡大とに、「暴力」や「恐怖」という表現を限るべきである。このことに留意しておれば、われわれは、暴力や恐怖が独裁そのものの特徴を示すものではなく、それらは独裁の最初の段階の特徴であることを、たやすく認識することができるであろう。この最初の段階は、一般的に革命的であり、それゆえにまた、本質的に不法である。もし独裁がこの危険な状態をうまく切り抜けることに成功すれば、独裁はふつう、暴力や恐怖とによってかわって——もちろんある程度であり、またしばしば後退をくりかえしながらではあるけれども——、ときによりいささか苛酷ではあるが、より一層効果的な行政・司法の類の合法的手段を用いるようになるのである。これが「正常化」の段階であり、この段階では独裁は「尊敬されるべきもの」となり、また、その経済的・財政的・国際的地位を強化することに努めるのである。したがって、これらのものを、独裁の初期の段階では耐え忍ばざるを得ないのである。

一般的に、軍事的独裁はこれらの消極的手段で満足し、政党的独裁は積極的手段をも使用する。かれらはオートクラットの意見や意思や感情を、宣伝活動によって、たとえば、きわめて感情的で不合理で不正な手段による世論の捏造や改造によって、押しつけるのである。これらの手段に加えて他の手段がよく知られている。そのいくつかは、大衆誘導（mass-suggestion）あるいは熱狂的にさせる性質のものである。たとえば、国家や政党の象徴の盲目的崇拜、煽動的な音楽放送、大規模なデモンストレーション、また、誇りや憎しみをかきたてるのがその主な目的である誇張した言辞、そしてデマの押しつけなどがある。そのほかの手段は、もっと地味な性質のものだ。たとえば、盲目的服従へ導こうとする教育としての全国民の軍事訓練、学校教科書の加工、ニセの科学的学説をひろめること、そして科学者、ジャーナリスト、政治家への大規模なワイロなどである。

しかしながら、これらはすべて、もし高遠な理想——たとえば、忠誠、信念、権威、統一、権力、愛国心というような古い高遠な理想、新しい高遠な理想、あるいは回復した高遠な理想——への不断の強力な訴えがなされなければ、そしてまた、命令をおこなう集団や個人の側の個人的な権利ないしは利益の英雄的な自己否定の精神への同様な訴えがなされなければ、最近の民主主義的で自由な過去を経験することによって教化された人びとにたいして、命令を下すことは十分にはできないであろう。そのような理想こそ、独裁支持者がつねに声を大にして、心をこめて語っている「自由」なのである。なるほどその自由とは、独裁の支持者を、またできることなら他の誰をも、随意に扱うことができるという自由である。がしかし、それは、独裁支持者が自分たちの代表だと思っている人、または団体の自由であり、独裁支持者が自分たちと同一視しようとする人または団体の自由である。独裁の支持者たちは、他の国民がどうして隷従について語るのかを理解し得ないし、またかれらは独裁ということばを不快にさえ感じているということは驚くにあたらない。他方また、深



く根を下した民主主義的確信をもっている人びとは、命令のこの理想的側面を信じがたく思っており、それゆえ、かれらは独裁権の増大・維持の重要性を軽視しようとするわけである。

宗教の力は衰えたから普遍的な理想への訴えは望みがないであろう。そして事実、自己の国家、自己の国民、自己の民族、自己の階級の自画自賛は、往々にして、他のすべての国家、国民、民族、階級への憎しみと軽蔑とに結びつき、宗教心にとってかわっている。このように、すべての新しい独裁は国際的ならびに社会的無政府状態を増大させている。そして、国家間や階級間の争いを防止するのに役立たないことは明白である。しかしながら、より偉大な自己へ発展するための自己否定への訴えは——それは、一般的に、当然のことながら、国民のうちの一層ロマンティックな若者たちに向けられたものではあるが——、個人の自由や自己主張の抑制にたいする償いを、結局はすることができるかどうかということとは疑わしいようである。独裁体制のこの部分は、すでにイタリアにおいては、ことに以前はファシズムの要塞であった学生のあいだでは、壊れてしまった。またドイツでも、それは弱まりつつある。ところがロシアでは、まだ、それは成功しているようだ。

(5) われわれが、さきに歴史的な要素と呼んだ第三番目の要素が、まだ説明されなければならない。この要素のなかに兼ね備わっている二つの概念——デモクラシーと自由主義——は、同じことを意味しているのではない。私は、一つの例で満足しなければならない。帝政ロシアの政府は、他の政府というものをまったく知らないロシア人民に、あるいは少なくともこれよりもっと高い階級に、穏当な程度のものであれば、批判や論議や情報の交換をおこなうことを、さらには組織的な議会批判をさえ、許容する余裕をもっていた。これらの自由の恩恵を、イギリスや合衆国の政府は、大戦中明らかに軍事的な理由のために、国民には与えないでおくことが必要だと信じていた。もちろんそうだからといって、ロイド・ジョージやウィルソン大統領のような指導者がもっていた民主主義的確信を、だれも疑い得なかった。

(6) 上に述べたことは、われわれの定義を説明するために十分役立つものとなろう。しかしまだ、それは、他のすべての定義と同じく、定義の三つの要素のそれぞれにおいて、語義的・科学的理由から正当化される必要がある。われわれは、まず、語義的側面を考えてみよう。たぶんオートクラシーというような政治的要素にたいして、語義的な異議はないだろう。命令というような独裁の技術論的要素は、一見してその場で正当化されるし、また語源的にも正当化される。ローマ人は、まさにかれらがそのことばをつくり出したのであるが、ある種の指揮官を「独裁者」(“dictator”)と呼んでいた。なぜなら、それらの人は同僚をもっておらなかったし、またそれゆえ、かれらは諮問会議(consults)や執政官(prætors)や議員といったかれらの支配の手段を議論することに従わなかったのである。しかし、歴史的要素は本当に必要なのだろうか。私はつぎのように思う。すなわち、歴史的要素のみが、クロムウェルを独裁者と呼ぶがヘンリー8世をそうは呼ばず、ナポレオンを独裁者と呼ぶがルイ14世をそうは呼ばず、ボルシェヴィーキを独裁者と呼ぶが帝政ロシアのツァーをそうは呼ばないことで、ことばに正当性を与えるのである。ヘンリー8世、ルイ14世、およびツァーは、実際には被治者の同意から独立していたのであり、このため被治者にはごく限られた限

度内での場合を除いては批判し反対することを許さなかった。しかしその臣民は、ごく最近まで、民主的で自由な政府の形態を経験していないものだから、かれらはまだ支配者を記憶している。一般的に認められているこうした違ったことばの用法が、クロムウェル、ナポレオン、ボルシェヴィーキはかれらの権力を革命やクーデターに負っていたという事実（これは定義の一つの要素となるだろう）によって正当化されるわけではない。というのは、世界中のどの政府の形態も、たとえば自分のところは正統で純潔であると訴えようとしても、多かれ少なかれ、遠い昔に革命的過去を、また多かれ少なかれ、栄光ある革命的な過去をもっているものである。しかし私は、独裁ということばの定義は、この点により一層完全に発展し得るものと認める。すなわち、古代の暴君とルネッサンスの貴族との比較は、たぶん、この要素をより一層系統だったものに導くであろう。

(7) われわれの定義は、また、科学的にも有益なものとして正当化され得るものと確信する。政治的要素は、われわれが独裁をデモクラシーと区別することを可能にさせるし、技術論的要素は、独裁を自由主義と区別することを、また歴史的要素は、独裁を絶対主義と区別することを可能にさせるのである（これらの諸概念のいずれもが、つねに固定した定義ではなく、融通性のある定義であることを要求するし、またボーダーライン・ケースや相互転換を認めている）。戦争中、交戦国が慣れ親しんできた命令は、戦後における驚くべき独裁の結果を説明している。いまでもなお、国民が民主主義や自由主義の良き旧き時代を覚えているという事実は、多数の支配を望んでいるのはたんに少数の者だけではないのではないのか、という懷疑論的な疑問を生ぜしめる。そして、その事実は、なぜ年とった世代の者は、より若い世代の者よりも命令を受けいれることを一層ひどくいやがるのかということを説明しているのである。他方、これは、残存する民主主義的・自由主義的な勢力の攻撃によって将来独裁が崩壊することを、われわれがある場合に予測することを可能にするのである。また歴史的要素は、なぜ命令の手段は旧制度の場合におけるよりも、現在では一層強力に発展させられねばならないのか、なぜ一層一般的に適用されねばならないのか、を説明する。さらにまた、なぜ、たとえばあらゆる方面へのスパイ行為が現代の独裁のもっとも特徴的な現象の一つとなったのか、を説明するのである。絶対主義の時代には、たんにある集団だけが政治的情報を占有していたか、あるいはまた、政治的反対集団を形成することを望んでいた。だから、それらの集団だけが警察の手によって調べあげられてしまったわけである。ちょうど、フランスの貴族、ドイツの若者（Burschenschaften）、イタリアの愛国者、ロシアのインテリゲンチヤーのように。一方、何百万人という人びとは告発されることになれており、ごく以前にも何百万人という人びとが、公然の反抗をしていた。そして、それゆえ、何百万人という人が何千人かによって調べあげられねばならないのである。そのときには、恐怖、風評、密談、秘密行為、恥かしめが、リスボンからウラジオストックに至る世界の大部分の雰囲気であるという結果をとまなう。独裁的な組織のなかでも、その不気味な名前が秘密政治警察を表わしているロシアの OGPU、イタリアの OVRA、ドイツの Gestapo ほど恐怖の念を感じさせるものはない。さりとて、国民がこの雰囲気の中で窒息していると思ひ込むのは、大きな誤りであろう。つまり、たいていの国では、政治的諸権利を欲している

ものは、国民の一部分のものだけにすぎないのである。大多数のものは、自分たちから責任をとり除いてくれる人びとに感謝しているわけである。

命令の方法の多くのものは、現代の機械文明によって、より効果的なものになってきている。現代の機械文明のもとでは発達したコミュニケーション、輸送、宣伝のすべてが独裁者の意のままにされている。だから、高度に文明が発達した諸国は独裁から自由ではいられない。反対に、かくして現代の独裁の特徴としての現代的感覚を与えているのは、技術論的要素、ことに大衆誘導の形態である（多くの観察者は、独裁を「暗黒時代の復活」と述べている）。この要素は、科学的生命（scientific life）は、あらゆる独裁のもとで、徐々に衰退することを証明している。真理の公平な探究や恐怖なくできる真理の告白の精神が服従や宣伝の精神に置きかえられるところでは、また、大学さえが知識のつめ込みや政治的煽動者の養成所にかえられる危機的状態にあるところでは、科学に何ものも期待できない。政治以外の多くの分野では、新しい重要な真理の告白は、諸大学の公式の意見や影響力をもった学者の個人的見解や既得利益にたいして立ちむかうことを意味するのである。これには勇気が必要だ。独裁者が支配するところでは、勇気が強要される戦場を除いては、勇気はくじかれる。これは真理が栄える雰囲気ではない。真理を発見し擁護できる特性、真理を学び教授できる特性は、しまいには死に絶えてしまうにちがいない。それから、独裁政府は、どんな政府でも期待するところの能率の点で損をする。それは、われわれが生きている現在のような時代、すなわち複雑にこみいった度合いをますます増しつつある政治生活、経済生活が、これまでも増して一層よく科学的に訓練された官僚制度を必要としているような時代において、もっともその損失は大きいであろう。これは、独裁のもっとも弱点とするところの一つである。結局、命令に頼っている諸国家とそうではない他の諸国家とのあいだに不一致があるという事実は、あらかじめ何らかの統一した政治組織を創り出すことなしに、ヨーロッパに「集団体制」を設立しようとする現在の企てが誤っているということを説明している。たとえば、軍縮交渉がそれらの違った国家間に成功裡におこなわれたとしても、必ず民主主義国家の一方的な軍縮という結果になるだろう。民主主義の国家では、条約の義務に服することを、相手国によってだけではなく、国内の批判者や反対者によっても強く要請される。独裁的国家は、しかし、民主主義の国家が万一非合法の軍備をもっていることを知れば、どんなものでもこれを高度の背信行為として懲罰しこれらの軍備を押えつけるのであるが、一方同時に独裁の国家は自国の同じように非合法な軍備を行い、公式の外交上の抗議に対しても条約は完全に無効だと主張して、その非合法な軍備を保持するのである。こうした「全面軍縮」は、現在の条件のもとでは、簡単に、全面的独裁か全面的戦争、あるいはその両方となるのである。そしてこの不安は、民主主義の諸国家のあいまいで気の乗らない態度を説明している。

## 2 独裁の分類

（1）定義の真のテストは、しかし、その政治的要素が、分類すなわち諸定型の社会学的区分の基礎となり得るという事実のなかにある。私が、「定型」（“type”）という用語を、マックス・ヴェー

パーの意味において用いているということ、すなわち、一つの平均を代表していると要求するのではなく、まして歴史的現実（これはけっして「純粹」ではない）の精密な表象であることを要求するものではないところの「純粹型」（“pure type”）を意味するものとして使っているということは、ほとんど説明するまでもない。純粹型というのは、たんに記述のための単純化であり、測定の基準であり、分類の道具であるのだ。しかし、定義と同じように分類は真でも偽でもなく、ただ多少役立つだけであるということ、しかも原則的には、数個の分類——そのそれぞれが、よく知られている論理的要請にしたがわなければならないが——が等しく可能である——特殊科学の要求に同じように役立つのではないが——ということは、たぶん、指摘されねばならないだろう。われわれは、独裁をそのイデオロギーによって、あるいはその経済綱領によって分類する気に誘われるものである。しかし、独裁に関する多くの文献が示しているように、この試みは時期尚早である。すなわち、こうした多くの試みは、哲学的な机上の空論にすぎず、さもなければたんなる政治的プロパガンダである。それは重宝な用語をつくり出すでもなく、ましてや明確なる概念ないしは明確なる分類を生み出すこともなかった。「独裁」という表題の著作には、ファシスト的定型に言及しているにすぎないということに気づいていないものが数多くある。さらには、独裁を「資本家」あるいは「下層中産階級」の利益の表現と説明するもの、「戦後の現象」あるいは——とくにヒトラー主義の場合には——「屈辱的講和」の結果と解釈するものも数多くある。これらの著者が、まず、自己の研究対象を限定し、つぎにそれを分類する労をとっていたならば、独裁は——君主制、共和制と同様に——いくつかの経済的内容によって十分定義されうるものだということが容易に理解できたはずである。「天国も地獄もともに独裁なのである」。独裁は、戦前にも戦後にも、戦勝国にも敗戦国にも、また中立国にも存在する。独裁は数世紀間生成されつづけてきたのである。古くかつてのドイツの伝統の完全な表現であり、必然的な帰結であるヒトラー主義も然りである。分類、概念、用語なしには科学的叙述も科学的比較もあり得ない。心理学的分析、歴史的研究は、いかに深く内容豊富であろうとも、その代替物とはなり得ない。したがって、私は、社会学的構造にしたがって独裁の定型論を、すなわち、独裁の「骨格学」（osteology）という地道な仕事を試みることによって、独裁理論に指針を与えたいと思う。この限定的な意味において、私は、オートクラシーの政治的要素を社会学的定型論の基礎にしたいと思うのである。

（２） オートクラットは、あるいは個人であり、あるいは集団である。前者の場合は個人的独裁であり、後者の場合は集団的独裁である。個人的独裁、ことにファシストタイプの場合には、独裁者は指導者原理（Führerprinzip）によって自分の部下を支配する。Führer ということばは、leader ということばに翻訳できず、デモクラシーを採用している英国国民にとっては不可思議なことばである。Führer の特徴は、かれは自己に従属する人びとには責任を負わず、自己の上に位する人びとにのみ責任を負うという点である。すなわち、かれは、何人にも責任を負うことのない絶対至高の Führer ないしは Duce に対して責任を負うということである。もっともその場合、その至高の Führer, Duce は、歴史に、自国民に、自らの良心に、神に、あるいはその他の有効な統制と強制

の手段をもたない存在に対して責任があるのだと主張する。したがって、至高の Führer は「優れた人」(“superior”)である必要はなく、権威者である必要はない。かれは、マックス・ヴェーバーの支配の理論の意味における「カリスマ」的人物でなければならない。すなわち、自分が Führer としての天職を与えられているということを立証するのに、ただ、自分が Führer であるという事実によって、また、自己の無責任な指導を自己につき従う人びとが許容しているという事実によってする魅惑的な人物であるのだ。それゆえに、その指導者原理が意味するのは、至高の Führer がそのつぎに位する Führer を指名し、その人がさらに下位のものを任命するということである。そのさい、正しい意味でなんらかの選挙は一切排除される。このピラミッドは、その頂点を基礎としているのである。集团的独裁においては、オートクラットは集団であり、その集団はそれ以外の国民から独立した存在である。しかし、その集団内部の構成は、必ずしもオートクラティックではない。ソヴィエトロシアの場合がその例である。ここでは、一集団、すなわちボルシェヴィーキ党の独裁である。しかし、その政党自体は、民主的ルールにのっとっている。その党には Führer は存在しないが、責任ある指導者たちが存在する。各段階の指導者(複数の)は、その上位の指導者(複数の)を選ぶ。各指導者は、自己を選挙した人びとに対して責任を負っている。このピラミッドは、その底辺部に依拠している。その党が党内の討議を抑圧する無慈悲なさまは、個人の権利に対する自由主義的尊重の欠如を示しているが、一般にいわれているような民主主義的信念の欠如を立証するものではない。死刑の執行でさえも、被執行者の同意にもとづいて行われているように思われるのである。

(3) 集团的独裁と個人的独裁とは多くの異なった特色をもっている。それゆえにこの分類は、きわめて有効である。

- 1) 情報は、被治者には与えられてはならないが、独裁者はそれをもたなくてはならない。それゆえ、個人的独裁では、情報は独裁者個人、かれの最高の協力者およびかれらの個人的なスタッフに限定される。これに反して、集团的独裁においては、集団内のすべての者が多少とも情報を与えられねばならない。
- 2) 個人的独裁では、「主義」を批判することよりも独裁者たる個人——かれは呪術的神聖さを与えられている——を批判することの方が罪が重い。これに反して、集团的独裁においては、指導者 および 一つ一つの政策にたいする批判は自由であるが、その政治の基礎になっている「主義」にたいする批判はタブーである。
- 3) 汚職は非民主的な国家では本質的な特色である。このことは、アメリカ合衆国が示しているところであり、まさに汚職は民主政治を腐敗させるものである。けだし、オートクラシーはすべて、新聞や議会という世論のもっとも強力な代表装置によるコントロールを排除する傾向があるからである。
- 4) あらゆる独裁にとっての危機的なモメント、すなわち独裁者の死は、個人的独裁においては非常に危険であり、その独裁を突然崩壊させることがある。しかし集团的独裁では、このよう

なことはない。なぜなら、グループが指導者を存続させているからである。

このように一般化されたことは、典型的な集団的独裁と典型的な個人的独裁との比較によって確認される。ソヴィエトロシアにおいては、ファシスト・イタリアにおけるよりも多くの情報が与えられ、また汚職は少ない。指導者たちへの批判は、モスクワでは意外なほど自由だが、ローマではまったく不可能である。一方、現在の政治家たちに対してよりも、主義に関心をいだく大学は、イタリアよりもロシアで口を封じられている。ムッソリーニ体制のもとでは、英雄崇拜はすでに熱狂的になっており、宗教的礼拝の対象にさえなっている。国家の高官や政党の指導者でさえ、公然とDuceの忠実な道具たることを誇りとしているほどである（Duceは気ままにかれらの位階を上げたり下げたりする）。しかし、ボルシェヴィーキ党書記長・スターリンはカーニンやモロトフに命令を下す権限をもたず、またその権利もない。おそらく、そうしたいという願望をもっていない。カーニンやモロトフが、スターリン個人に対して——二人の神秘的英雄、マルクスとレーニンに体现された政党原理に対してではなく——無条件に忠誠を誓うというかれらの職務上の宣言は、受けいれられないばかりか、反逆的でさえあると考えられている。レーニンからスターリンへの移行は、大変困難な問題であったため、ボルシェヴィーキ党内において最後まで論議された。しかし、ソヴィエト体制に疑問がさしはさまれることはなかったのである。他方、ムッソリーニの死は、かれの国内の敵でさえかれの長命を願うほどの危機的状況をうみ出すであろう。

（４）さらに、独裁の定型は、支配する集団ないしは支持する集団にもとずいて分類され得る。個人的独裁では、「スタッフ」は、政党、公私の軍隊、暴力集団、教会、官僚などから構成されるであろう。また集団的独裁では、その集団自身が独裁者であるだろう。この場合、階級の独裁（マルクス主義的意味での）というものは、歴史上その例がない。ソヴィエトロシアは、いうまでもなくプロレタリアートの独裁ではなく、政党——それは、ロシアのプロレタリアートの組織ではない——の独裁である。いわゆるブルジョアジーの独裁——マルクス主義の文献では、ブルジョア独裁は革命を正当化する根拠であり、同時にプロレタリアートの「アンチテーゼ」に対する弁証法的「テーゼ」としての意味が付与されている——も同じく存在しない。ブルジョアジーの権力がヴィクトリア中期のイギリスより巨大であったためしはどこにもない。この時代は自由主義の全盛期であり、政治的革命は嫌悪され、批判や反対、議論や情報が謳歌された時代であった。階級の「独裁」という場合は、ある階級がとくに大きな勢力をもっているということを、宣伝的に誇張していつているにすぎない。現代においていちばんしばしば見られ、かつ重要な定型は、軍事的独裁、政党的独裁、および行政的独裁である。第一の場合は軍隊が、第二の場合はある政党が、第三の場合は官僚（警察を含めて）が、支配権をもっている。これらの集団は、ある階級の利益にもとづいて独裁的に支配することもあり得るが、どれも一つの階級ではない。

（５）個人的独裁と集団的独裁の区分は、支配の政治的形態にもとづく分類である。諸集団の区分は、社会的諸勢力にもとづく分類である。後者は前者の一部門ではない。両者は互いに交錯しているのである。同じことは、独裁の第三の分類、すなわち、量的構造にもとづく分類についてもい

える。ある一つの集団、たとえば一政党あるいは一個人（おそらく、たとえば私的軍隊といった集団によって支持されている）がオートクラティックに支配している場合を、一元的定型の独裁といえるであろう。したがって、多元的定型の独裁は、国内にその独裁者の意思に従属しない有力な個人が存在する場合、あるいは、集団的独裁をめざして、また、個人的独裁者のスタッフになろうとして競争するいくつかの集団が存在する場合といえる。もちろん、その場合には、一集団ないしは一個人がとくに優勢であるか、少なくとも、同輩中第一等の人でなければならない。また、その対抗・競争も平和的に統制された協働であることもあろうし、かくれた陰謀であることもあろうし、おたがいの公然たる迫害であることもあろう。多元的形態は、「強力な沈黙せる人」を求める強権政治論者の意味においては能率的ではなかろうし、多元性は軍事的独裁の一つの弱点となる。しかし、政党的独裁においては、多元的形態は——競争が平和的であるという条件つきで——優越している。前述した独裁の危機は、独裁の軌道外のなんらかの権力が継承者を指名できるならば、危機的とはならないであろう。ドイツの独裁者の死が何をもたらしかを考えることは、だれにもできない。それは、内乱と混沌をひき起こし、最後には、新しいタイプの独裁——おそらく軍事的独裁——を生み出すことであろう。ファシスト・イタリアにおいては、継承問題は、すでに法律によって定められている。可能性のある継承者のリストは、ムッソリーニによって作られ、議会（Gran Concilio）によって承認され、国王の手に保管されている。おそらく指名されるであろう人の名前さえ明らかなのである。しかし危機——それは非常に危険ではあろうが——は、急速な——しかし、必ずしも平和的ではないが——解決の機会を生みだす。この分類の場合にも、二つのタイプの結合が考えられる。たとえば、現代のすべての独裁のうちでもっとも強くもっとも成功したものであるトルコのケマル・アタトゥルク（Kemal Atatürk）の独裁は、支配の政治形態については、まったく一元的である。すなわち、トルコでは、何人も不服従を貫き通せるチャンスをもっていないのである。しかし、それを支持する社会勢力についていえば、その支配は極度に多元的である。「ガージー」の権力（“Ghazi's” power）は、もともと、軍隊を勝利に導いたかれの指揮にもとづくものであったのだが、かれは、官僚機構、警察、議会、およびかれの政党（今では実際に全国民を包括しているが）に力を平等に配分している。かれは、直接あるいは間接に、軍隊の将校、大臣、官吏、議会のメンバー、政党の指導者を任命し、こうしてかれらの平和的かつ対等関係による協働を確固としたものになっている。このタイプは——ラテンアメリカに類似のものがあるが——、全体主義的・個人的な独裁（a totalitarian personal dictatorship）であるといえよう。

（6）すでにみてきたように、これらの分類はすべて互いに交錯している。たとえば、軍事的独裁（バルカンで行われているのはこのタイプのようだが）は、あるいは個人的でありあるいは集団的である。個人的形態では、軍隊はオートクラットの主たる支持者、そのスタッフの核を構成する。このタイプは軍隊指導者の独裁と呼ぶことができる。軍の指導者は通常は将軍である（ポーランドのピルスドスキー、ラテンアメリカの多くの独裁者）が、国王であることもある（ユーゴのアレクサンダーのように）し、また非軍人であることもある（ポルトガルのサラザール教授のように財政

学の専門家など)。第一期の陸軍元帥ヒンデنبルク大統領下のドイツは、このタイプの独裁への進路に沿って進んでいた。そして第二期では、一段と進展し、ヒットラーのファシスト独裁によってチェックされるまで続いた。集团的形態では軍隊それ自身が実際の支配者である。これは、有名なスペイン語の表現を用いるならば、フンタ (Funta) 独裁といってよいであろう。その主な例はプリモ・デ・リヴェラを首領とする將軍連のフンタが支配したスペイン、「軍隊長の」ポーランド、そしておそらく日本である。スペインの独裁は、「プリトリーアン」と呼ばれてきた。というのは、それは、長期にわたって軍国主義的だとみなされてきた国家に課されたものだからである。このことが、スペインの独裁が異常に弱いことの理由の一つであった。しかし、現代の軍事的独裁は、固有の矛盾をもつがゆえに虚弱である。それは一方において、必然的に多元的性格をもつ。現代国家の政府が処理すべき政治問題のうちで、軍隊の利益に関係するものはわずかしかない。現代の独裁では、軍隊はつねになにか他の社会層に依存している。それは、貴族、王家、聖職者（スペインにおけるように）、である場合もあろうし、日本におけるように農民、天皇であることもあろう。また、シュライヒャー將軍指揮下のドイツ国防軍は、もし將軍が首相の座にとどまっていたとすれば、そうしたであろうように、労働者階級に依存する場合もあるであろう。他方、軍隊は、あるいは少なくとも現代の軍隊は、戦時に全国民の熱狂的支持に頼らねばならないので、階級闘争や政党間の争いの外に立とうとする。そして、軍隊の重大な利益が関係する場合にのみ、表面にあらわれ、それまで潜在的であり、民主主義的あるいは社会主義的装いをとっていた軍事的独裁が、必然的に顕在化してくるようになる。セルビア王国、スペイン王国、およびドイツ共和国の歴史が興味深い例を示している。1928年にドイツ政府が不承不承おこなったポケット戦艦の建造は、第一期目のヒンデブルクの下における潜在的軍事独裁の勝利であった。また、1932年のフォン・パーペン (von Papen) によっておこなわれたプロイセンの民主的支配者放逐は、第二期における顕在的軍事独裁の勝利であった。ユーゴスラヴィアのアレクサンダー王による主権的独裁はこの二つの局面を経験した。

(7) 政党的独裁もまた、あるいは個人的でありあるいは集团的である。いずれの場合にも、支配的政党は国民の一部のもの以上になろうとし、またある階級を絶滅し、他の全政党を弾圧する（資金、建物、機関紙等の装置を没収するなどして）ことによって、全国民を抱き込もうとする。支配的政党は、熱心に大衆、とくに愚民（プリトリーアン・タイプの軍事的独裁によって軽蔑されている）のごきげんを伺って、その歓心を誘おうとする。大衆は、一つの間精神、とりわけ支配的政党の間精神で統一されることになる。かくして政党間の争い——これは政党制度に固有の症状ではなく、人間の性格や歴史にもとづく対立・敵対傾向の不可避的表現である——は、陰惨に進行する。この争いは、個人としての独裁者あるいは独裁集団を支配するための政党指導者間の陰謀という形をとり、多少とも血まぐさい方法によって、秘密裏におこなわれ、周期的なパージへと進む。集团的政党独裁の顕著な例は、ソヴィエトロシアのボルシェヴィキ党の支配である。この政党の階級構造は非常に複雑である。すなわち、主として知識人、工業および農業労働者、小農民、あらゆる



る階級の青年、および巨大国家と政党の官僚から成っており、貴族階級、ブルジョア階級を排除し絶滅させようとしている。政党の官僚は、赤軍とともに政党のスタッフを構成している。また、赤軍は強くボルシェヴィーキ化されており、ソヴィエトロシアでは、私的軍隊ないしは政党自身の武装を必要としない。このことと、一定の階級の排除ということとが、集团的ボルシェヴィーキ独裁と個人的ファシスト独裁とのいま一つの主要な構造上の違いである。もちろん両者は、イデオロギー面、経済面で多くの共通点をもっている。しかしながら、それらはすでに多々論じられており、いまここでながながと論ずる必要はあるまい。

ファシスト独裁は、個人的政党独裁である。より厳密に言えば、オートクラティックに国民を支配する武装政党に対するオートクラティックな Führer の支配である。ファシズムは、当初から、すべての階級の理想と利益を結合しようと努め、それに成功した。しかし、イタリアではより上層の中産階級、ドイツではより下層の中産階級の心理が、わずかに優勢であった。ヨーロッパには、ファシスト独裁ないし疑似ファシスト独裁の例は多い。しかし、ここでは、ハンガリーおよびバルティック諸国の例を論じることはできず、もっとも重要な例、ムッソリーニおよびヒットラーの場合に関心を限定せねばならない。この両者のイデオロギーは、その経済的傾向とともに非常にしばしば解明されてきたので、それ以上の説明を要しない。しかし、つぎのことはほとんど指摘されてこなかった。すなわち、生来のオーストリア人が、ドイツに命令を下すことができたならば、全体主義国家という思想は、イタリアにおけるほど重要な役割を演じなかったであろうという点である。それは必然的に、緊密な関係をもった人種の統一体としての全体主義国家という思想によって補足されねばならなかった。このことは、イタリアのファシズムが、国民の少数者の国籍を奪い、一方、ドイツのファシズムが、その支配下にある一つの人種の少数者だけを絶滅することを強引に進めた理由を説明しているのである。このように、全体主義国家は、領土や住民に関して帝国主義的たるざるをえない。全体主義的国民は、好ましくない住民が後になってからいくらかのよく試みられた方法によって除去された領土に関してのみ、帝国主義的となる。ギリシャ人に対するアジアの古代の故郷からの放逐は、おそらくその最初の例であろう。さらに、重要な構造的相違が存在する。すなわち、ドイツのファシズムは、死に至るまで極めて重要な人物であった帝国大統領の死以後、一元的になったという点である。この出来事は、帝国国防軍を、Führer に完全に忠誠であるナチス国家内のたんなる一グループに格下げしてしまったのである。このことは、ほとんどの観察者によって看過されている。イタリアファシズムは、最初から多元的であったし、おそらく今後もそうであろう。イタリアの独裁者は、王家との烈しい公然の闘争において、軍隊をあてにできるかどうかは不確かなのである。またローマ法王は、いまなお強い権力をもっており、その同意なしには聖職者は命令を下されることはないのである。

(8) オーストリアの場合は、やや異なっている。ドルフス (Dollfuss) およびフォン・シュシュニツヒ (von Schuschnigg) は、圧倒的多数の国民の意思に反して、オートクラティックに支配した。また命令によって、政党の党首として、キリスト教社会党を支配した。さらに、かれらの経済

綱領、(実在せぬ) 共同体国家 (the <non-existent> corporate State) は、ムッソリーニおよびヒトラーのそれと類似し、それゆえかれらの体制は、しばしば「ファシスト的」と呼ばれるのである。しかしながら、社会学的構造が異なっている。政党は、つねに大きな役割を演じているとはいえ、絶対至高のものではない。体制は、ムッソリーニのそれより、はるかに多元的であるし、ヒトラーのものとは比較すべくもない。その体制は、郷土防衛隊 (Heimwehr) とその指導者・シュタルムヘルムベルク王子等のような他の国民諸組織の援助、ローマカトリック教会や国際連盟といった国際的諸勢力の援助、そして外国勢力の援助がなければ、維持できないのである。その上、かれら自身の軍備は、郷土防衛隊や正規軍のものと比べて、とるに足りないほどのものである。警察と官吏は、オーストリアの独裁の真の支持者である。したがってそれは、行政的独裁の分類に入れられるであろう。ドルフスの場合とフォン・シュシュニツヒの場合にも相違がある。すなわち、前者の行政的独裁はより個人的であり、後者は集团的である。ドルフスは、個人的に、キリスト教会や一定の外国勢力の信頼を得て、オーストリアの繁栄と安全にとって不可欠の人物になったため、かれの政党を、オートクラティックに支配することができたのである。他方フォン・シュシュニツヒは、かれの政党の指導者たちによって、ただたんに選挙されたというにすぎず、かれらの同意なしには何もなし得ない。

(9) 独裁の定型論は、社会学的理論が解決しなければならない諸問題の一つにすぎないが、それでも、不可欠の一つである。これらの諸問題のなかでもっとも人気があるのは、独裁とある階級の経済的利益との関係という問題であり、もっとも重要なのは、独裁の生成・発展・消滅の諸条件に関するものであろう。独裁の定型論は、国際的にもまだほとんど取り扱われたことがない。このことは、たんなる素描にすぎず最初の試みであるこの論文の不十分さに対する弁明となろう。しかし、非社会学的文献も、将来のあらゆる種類の社会学的研究にとって価値ある資料や思想を含んでいるのである。

#### 註

- 1) Dictatorships は、カントロヴィッツのイギリス亡命後に、当初, POLITICA, Vol. I, No. 4, August, 1935 (by the London School of Economics and Political Science, University of London) で発表されたものである。
- 2) Der Kampf um die Rechtswissenschaft, 1906 が当時のドイツの法学界に与えた衝撃と影響については、かれの論文集 Rechtswissenschaft und Soziologie, 1962 の編者トマス・ヴュルテンベルガー (Thomas Würtenberger) の「編者序文」に詳しい。なおヴュルテンベルガーは、カントロヴィッツの Der Kampf um die Rechtswissenschaft を „Kampfschrift“ あるいは „Streitschrift“ と呼んでいる。vgl. Thomas Würtenberger, Vorwort des Herausgeber, im Hermann Kantorowicz, Rechtswissenschaft und Soziologie, 1962 Verlag, S. 1-2.
- 3) 本書で示された定義の性質にかんするカントロヴィッツの考えは、のちの著作においても維持され、とくにかれの法概念論の基礎とされている。cf. Hermann Kantorowicz, The Definition of Law, p. 7.
- 4) 猪木正道『独裁の研究』創文社4-10頁参照。
- 5) シュミットの独裁論については、さしあたり, Carl Schmitt, Die Diktatur, 1923 を参照。
- 6) コバンのかかる分析については、さしあたり, Alfred Cobban, The rise of caesarism, また The social

interpretation of the French Revolution, 1964 など参照。

- 7) かかるハルガルテンの独裁論については、とくに、George W. F. Hallgarten, Why Dictators? The Causes and Forms of Tyrannical Rule since 600 B.C., 1954, (西川正雄訳『独裁者』岩波書店)を参照。
- 8) 以下の内容紹介は、カントロヴィッツの表現によって、できるだけ忠実に原著の内容を紹介するため、原著の部分訳の方法を採った。したがって、いうまでもなく、以下の文章における一人称はカントロヴィッツのものである。ただし、章節の見出しと番号は筆者(紹介者)による。